



WOODS&DESIGN
ASAHIKAWA



WOODS&DESIGN

ASAHIKAWA

2025

REPORT

木とものづくりの ISSUE / IDEA / DESIGN / ACTION



CONCEPT

国土の約7割を森林が占め、四方を海に囲まれた日本は、山から海へとつながる自然の循環の中で、豊かな恵を享受してきました。その森はいま、わずか約4万人の林業従事者によって守られています。

また、人手不足や海外材への依存などの影響で、伐期を迎えても手が入らずに放置される森が増え、同時に、伐採後の再造林も進まないという森の循環のほころびが広がりつつあります。

こうした課題に対して、私たちに何ができるのか。日本有数の「木」と「ものづくり」の産地である北海道・旭川に、多様な知恵や技術、能力を集め、デザインの力を生かして森の課題に向き合います。

WHY ASAHIKAWA?

豊かな森林資源、とりわけ北海道内陸部の厳しい気象条件のなかで育まれた良質な広葉樹に恵まれる旭川には、高い職人技術とデザイン性を背景に、高付加価値な家具や木工などの木にまつわるものづくり産業が集積しています。林業・木材業・ものづくり産業・小売業の距離が比較的近く、森林資源の管理・伐採(川上)から製材・乾燥(川中)、家具・木工品の製造、販売・流通(川下)まで、「森」から「ものづくり」への循環を地域のなかで完結できる産地は、全国でもそう多くはありません。

また、旭川市内だけでも、木材利用等に関する研究を行う「北海道立総合研究機構林産試験場」や林業・木材産業の人材育成を行う「北海道立北の森づくり専門学院」、木製品関係業界の技術・販売支援を行う試験研究機関「旭川市工芸センター」、ものづくり職人育成を行う「北海道立旭川高等技術専門学院」などの拠点施設が充実しています。

さらに、生活様式や消費者嗜好の変化、ウッドショックによる木材価格の高騰等の状況に応じながら、国際家具デザインコンペティション旭川(IFDA)の開催を通じたブランド力向上、デザイナーとの協業、地元材・広葉樹の利用促進、Meet up Furniture Asahikawa におけるオープンファクトリーの開催など、産官学が連携した様々な取組が展開されています。旭川は、日本全国の木にまつわる産業の課題解決のきっかけを創る力を持っている、そう信じて、私たちは旭川からアクションを起こしています。

HISTORY OF WOODS&DESIGN

2023-2025



あさひかわデザインウィーク2023

トークセッション

旭川の木材企業やフォレスターをはじめとする、普段は交わることの少ない産官学のプレイヤーが集い、熱気あるトークを展開した“WOODS & DESIGN”の活動のキックオフになったトークセッション。



あさひかわデザインウィーク2024

フィールドツアー&トークセッション

新庁舎建設で地域材が活用された旭川。その取り組みに着目し、森からはじまるフィールドツアーを実施。あわせて、日本各地から集まった森のエキスパートとともに次なるアクションをディスカッション。



大阪・関西万博2025

地方創生SDGsフェス／ブース展示

旭川市が内閣府主催「SDGsフェス」に出展。旭川で活動する若手デザイナーや職員とともに手がけた環境配慮型の展示デザインを通じて、日本有数の林産地・家具産地である旭川の魅力を発信。



あさひかわデザインウィーク2025

フィールドツアー&トークセッション

地域材の活用やデザイナーとの協業など、旭川の先駆的な取り組みから学びながら、他の産地の事例も踏まえ、家具産業・木材産業のリアルな課題に向き合うフィールドツアーと公開作戦会議を実施。

ACTION

地方創生SDGsフェス in 大阪・関西万博2025

木とものづくりを通して、 旭川の新しい可能性を探る。

大阪・関西万博において、内閣府地方創生推進室が株式会社コナミデジタルエンタテインメントと連携して開催する「地方創生SDGsフェス」に旭川市がブース出展しました。

木とものづくりの産地であり、ユネスコデザイン創造都市である旭川のまちな魅力を、人と森と環境にやさしいデザインを通じて発信。ブース全体に、北海道産の針葉樹や広葉樹を豊富に使い、木の香りとぬくもりを感じる空間に仕上げ、旭川の若手のデザイナーや職人たちが、今回の出展のために新たに家具（展示什器）やワークショップ（バードコール）などをデザインしました。可能な限り輸送に伴う環境負荷を低減し、ゴミの廃棄量を抑えた展示を行うため、コンパクトで運びやすい、軽量な家具を開発しました。ワークショップのバードコールづくりで使用するのは、旭川家具の製造過程ででた端材です。

開催期間 | 2025年5月28日(水)～6月1日(日) 各日10:00～20:00

開催場所 | 大阪・関西万博内EXPOメッセ「WASSE」

出展団体 | 52自治体(38出展ブース)

主催 | 内閣府地方創生推進室／公益社団法人2025年日本国際博覧会協会

協力 | 株式会社コナミデジタルエンタテインメント

西日本旅客鉄道株式会社(JR西日本)、大阪市高速電気軌道株式会社(Osaka Metro)

Peach Aviation 株式会社、株式会社朝日学生新聞社



ROUND TABLE

旭川デザインシステムから着想を得たラウンドテーブル。複数台を組み合わせると脚部分に旭川のインシヤル“A”が現れるように設計。北海道産トドマツの三層合板とアイアン脚を組み合わせ、シンプルながら印象的なアクセントをもつ家具に仕上げました。



POSTER FRAME

壁をさりげなく彩る、細身のシルエットが美しいポスターフレーム。マグネットで紙をシンプルに固定する構造で、挟んだものを傷つけることなく飾ることができます。紐の長さも自在に調整可能。北海道産のカバ材で製作しました。



HIGH TABLE

旭川の家具職人が、木材会社から出る針葉樹の端材だけを使ってデザイン・製作したハイテーブル。重厚感のある見た目とは裏腹に、各パーツは驚くほど軽く、コンパクトに折りたたむことができます。職人の確かな技術が随所に込められた什器です。



STOOL

森の中にちょこんと生えたキノコのような可愛らしさをもつ、匠工芸の「マッシュルームスツール」。別注として、北海道産のカバ材と赤のウルトラスウェードを使って製作。組み立て式で、スタッキングも可能。使い勝手の良さと遊び心を兼ね備えたスツールです。



BIRD CALL

旭川家具をつくる過程で生まれる小さな木の端材を活用して、バードコールをデザイン。木の種類やボルトの太さによって音色が変化します。四角や丸などの木材パーツと革ストラップを自由に組み合わせて、世界にひとつだけのバードコールをつくれます。



REPORT

あさひかわデザインウィーク2025

木とものづくりのISSUE / IDEA / DESIGN / ACTION

ものづくり産地フィールドツアー &トークセッション／公開作戦会議

3年目を迎えた“WOODS & DESIGN”。これまで、森を育むスペシャリストから製材のプロ、ものづくり職人、デザイナーや建築家、行政職員まで、さまざまなレイヤーで活躍する人たちがISSUEやIDEAを共有し、ACTIONを探ってきました。

「木とものづくり」と一口に言っても、そのサプライチェーンは複雑で、全体像をつかむのは難しいほど細分化されています。デザインにはプロダクトも、取り組みもあり、領域は多岐にわたります。家具メーカーも産地が違えば、素材や環境は千差万別。だからこそ職域や立場を超えて同じ場所に集い、同じものを見ることで、ISSUEの解像度は上がります。そして人と人が繋がることで、ビジネスの種が撒かれ、ありがたい未来に向けたACTIONの原動力にもなるでしょう。

今年のプログラムも2日間にわたり開催。初日の「ものづくり産地フィールドツアー」には多彩な顔ぶれの25人が集まり、8ヶ所でインプットを増やしました。旭川銘木市では、山から運ばれてきた丸太を前に、品質を保つ工夫を聞きました。家具メーカーでは、持続可能な生産をするべく新たな材を採用する挑戦に興味津々な様子。研究施設では、広葉樹の販路拡大や針葉樹の加工技術向上にける思いに接しました。丸太から製品になるまでの流れを目の当たりにした皆さん。旭川ならではの、川上～川下の裾野の広さを体感できたようです。2日目は公開作戦会議と題したトークセッションです。家具組合からは道産広葉樹を生かすプロジェクトなどが、旭川市の担当者からはデザイン都市の施策などが紹介されました。続いて4人のパネラーが加わり、「意識を変えべきは誰か」「針葉樹をどう活用するか」といった問いに対し、IDEAを共有。オーディエンスを交えた公開作戦会議では、ユーザーに価値を伝える方法や次世代につなぐための教育的なアプローチにも話が及びました。次なるACTIONへの期待が高まる中でクロージングを迎えました。

自然・ものづくり・デザインが結びついた旭川で何を学び、何が生まれたのか。高密度の2日間を振り返ります。

PROGRAM DAY1

ものづくり産地フィールドツアー

旭川の林業・木材産業・家具産業等の先進的な取組を学ぶ

日 時 | 2025年6月27日(金) 8:00 or 9:50～18:00

訪問先 | 旭川銘木市、旭川空港、匠工芸、大雪木工、キトウシの森 きとろん(昼食)、
旭川銘木、北森カレッジ、林産試験場、旭川デザインセンター、旭川駅舎

定 員 | 25名

移 動 | 貸切バス

参加費 | 無料(但し昼食は会費制)

集 合 | 前泊の方／8:00 旭川駅、当日入りの方／9:50 旭川空港

解 散 | 18:00 旭川駅



DAY2

トークセッション／公開作戦会議

旭川の取組から学び、新たな課題に関し、オーディエンスも交えて議論する

日 時 | 2025年6月28日(土) 10:15～12:30(10:00 開場)

場 所 | 旭川デザインセンター2F ADC MUSEUM

定 員 | 80名

参加費 | 無料

登壇者 | イントロダクション・ファシリテーション／齋藤 精一

セットアップトーク／藤田 哲也 氏、後藤 哲憲 氏

パネルトーク／岡田 明子 氏、倉本 仁 氏、佐野 亮 氏、緑川 新之介 氏



森の課題は、デザイナーや作り手、生活者が、森やものづくりの現場に
もっと近づくことで、少しずつ解決に向かっていくのではないかと
そんな問いに共感してくださる方たちと北海道旭川で集まり、
デザインの力で木にまつわる産業の課題解決を目指しています。

DAY1

FIELD TOUR



仲間の輪が広がる産地ツアー

ツアーでは、全国から集まった25人が1台のバスで移動しました。家具メーカー社員やデザイナー、建築家、林業アドバイザーなど、「木とものづくり」に直接関わりそうな肩書の人だけではありません。大型複合施設のマネージャー、パティシエ、地域おこし協力隊など、幅広い顔ぶれです。車内での自己紹介が終わると自然に、近くの人同士で話が弾んでいました。そして、訪問先で質問を投げかけたり、感想を共有したりして徐々に輪が広がります。昨年は、奈良県吉野の材を広島県の大手家具メーカーに提供するなど、WOODS&DESIGNへの参加をきっかけに新たなACTIONも生まれました。旭川で出会った仲間とのネットワークは、濃い2日間が終わっても続きます。



01 旭川銘木市

旭川地方木材協会



国内最大規模の
広葉樹取引市場

昭和42年から旭川林業会館にて開催されている旭川林産協同組合主催の丸太販売イベント。年に10回、道内各地から集められた「北海道産広葉樹」はもとより、本州や海外からも積極的に集荷し、様々な樹種が出品されることで知られています。出品される丸太は、欠点のない優秀なものから、こぶなどがついたものもあり、多種多様な木が敷地一面に並べられている光景は圧巻です。



02 匠工芸



無数の工夫が集まる
工場のデザイン

1979年創業の家具メーカー。自然に寄り添い、職人の感性を生かし、木材の個性を尊重する持続可能な家具づくりを続けています。「つくっているのは、心地です。」をスローガンに、ただ家具という「モノ」をつくるのではなく、その先にある使う人の「心地」をつくりだすことを大切にしています。木材の魅力を最大限に引き出すデザインと職人たちの技術が、匠工芸のものづくりを支えています。



03 大雪木工



地場産材の活用と
顔が見えるモノづくり

創業42年目を迎える家具メーカー。椅子を含む既製品家具・OEM、住宅・商空間、宿泊・医療施設向けの特注家具や什器など、様々な用途に対応しています。モノづくりの背景や環境を考えた活動『大雪の大切プロジェクト』を通し、道産木材の活用に積極的に取り組み、北海道の森を中心に考え、森・人・暮らしを未来へ繋ぐ、持続可能なモノづくりを目指しています。



05 北森カレッジ

北海道立北の森づくり専門学院



広い視点で考える
森と人の関係

北海道初の林業専門学校。校舎は、道産スギ・カラマツ・トドマツなどの木材を使用し、CLTやコアドライを適材適所に活用した混構造となっています。基礎教室および実習室はガラス張りとし、開放感を演出するとともに、講義や実習の様子を可視化。また、バイオマスボイラーを導入し、正面玄関に配置することで、再生可能エネルギーの活用を直接見学できるようにしています。



04 旭川銘木



欠点のない木材から
生まれる木の化粧板

旭川をはじめとする家具メーカーや建築業者に突板を供給している木材加工会社。突板とは、天然木を薄くスライスしたもので、家具や内装材の表面仕上げに用いられ、木の美しい木目を活かしながら、資源を効率的に利用できる素材として広く採用されています。木材の特性を熟知した職人による丁寧な加工技術により、地域の木工産業を支える重要な役割を果たしています。



06 林産試験場

北海道立総合研究機構



北海道の未来を支える
産学官連携の拠点

木材や木製品の研究開発を担う、北海道唯一の試験機関。道産材の特性や新たな活用方法に関する研究を行い、林産業の発展を技術面から支えています。館内には、北海道で生み出される優れた木製品と関連情報を展示する「木と暮らしの情報館」や、多雪・極寒地における北海道産CLTの材料特性を検証する実験棟「Hokkaido CLT Pavilion」などがあり、見学することができます。



07 ADC ASAHIKAWA DESIGN CENTER 旭川デザインセンター



産地と世界を
デザインでつなぐ

旭川家具・クラフトが一堂に集う複合施設。約1,000坪の広大な空間に、約30のメーカーが常設ブースを構え、約1,200点もの家具やクラフトを展示・販売しています。さらに、ユネスコ・デザイン都市に認定された旭川の「産業観光拠点」として、家具の歴史やものづくりを学べるミュージアム、ギャラリー、体験工房、ショップも併設しています。



08 旭川駅舎 北海道旅客鉄道 株式会社



駅を中心に広がる
市民交流の場

旭川駅舎は建築家・内藤廣氏の設計により2011年に完成した、地上2階建ての建築です。特徴的なのは、ガラスのカーテンウォールと、それを支える四又柱（よんさちゅう）による大屋根構造。全長180メートル、幅60メートル、高さ12.5メートルに及ぶダイナミックな空間で、道産ヤチダモ材を準不燃処理して内装に採用した先進的な事例としても知られています。

フィールドツアー参加者の声

旭川銘木市

「市場が活況で、北海道といえば広葉樹なんだなと分かりました」「普段目にするのは製材された木ですが、皮にも性格があるんですね」

匠工芸

「木工は料理のように、素材を余すことなく活かすものということが知れた」「工芸的で、とてもキレイな工場に驚いた」

大雪木工

「突板剥がし体験ができて楽しかった」「実際に作り手の方から話を伺うことができてとても良かった」

旭川銘木

「削りやすくするために熱湯で木を煮るなんて、考えたこともない」「0.17mmという超極薄の板を作ることがいかに凄いことか。繊細にして美しい作業工程。匠の技」

林産試験場

「土場の有効活用、CLT実験棟、さらに万博のCLT材の再利用強度の検証など、未来につながるお話を聞くことができました」

旭川駅舎

「カッコいい空間で驚いた。デザイン都市の玄関として素晴らしい駅舎」

PICK UP!

公開作戦会議は トーク前夜から始まる



ツアーを終えた夜は、待ちに待った懇親会。翌日の公開版とは違う、もう1つの“作戦会議”です。日中より打ち解けた雰囲気、自社の抱える課題を掘り下げたり、裏話に花が咲いたり。ツアーに参加できなかった家具メーカー社員やデザイナーらも合流し、輪が広がりました。ある参加者はメーカーの担当者とユーザー側の人を引き合わせていて、「何か始まりそう!」と予感させました。

DAY2

TALK SESSION

INTRODUCTION

旭川の「木」と「ものづくり」にまつわる
経験や取り組みを学びながら、
産地が向き合うこれからの課題に対して、
様々な地域のプレイヤーがアイデアを持ち寄り、
次なるアクションを考える公開作戦会議。



クリエイティブディレクター
パノラマティクス 主宰
大阪・関西万博EXPO共創プログラムディレクター

齋藤 精一
Seiichi Saito

建築デザインをコロンビア大学建築学科で学び、
2006年、株式会社ライゾマティクス（現：アブストラクトエンジン）を設立。2020年、デザインコレクティブ「パノラマティクス」を結成。2023年よりグッドデザイン賞審査委員長。

林業や木材産業に深い関心を持つきっかけとなったのは、2020年から2023年にかけて奈良県奥大和（南部東部地域）で開催された芸術祭「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」でした。芸術祭のプロデューサーとして、奥大和の雄大な自然や吉野林業との関わりを深めている中で、ウッドショックが起こり、私たちの周りに沢山の資源としての山や森があるにも関わらず、それが活用できていない事実疑問を抱くようになりました。また、奈良や旭川での出会いを通じて、林業の川上から川下までをつなぎ、今できることを考える活動をはじめました。「あさひかわデザインウィーク」における“WOODS & DESIGN”では、旭川の取り組みを学ぶことを主軸に今年もトークセッションとフィールドワークを実施しました。様々な地域や産業の方々とともに現場を見ながら、林業・木材産業・ものづくり産業全体の構造のあり方や行政との協業の方法、森との関わり方などについてディスカッションする機会を持つことができました。今後も日本各地の林産地での活動を続け、具体的なアクションに繋げていきたいと思ひます。

SETUP TALK

旭川の「木」と「ものづくり」にまつわる 経験や取り組みから学ぶ。

旭川家具工業協同組合 /
北海道家具工業協同組合連合会 理事長
株式会社カンディハウス 代表取締役会長

藤田 哲也 氏
Tetsuya Fujita



1960年、北海道生まれ。1982年に株式会社インテリアセンター（現 株式会社カンディハウス）に入社。2021年より同社代表取締役会長、あさひかわ創造都市推進協議会副会長等。2022年に（一社）日本家具産業振興会理事に就任。

旭川市経済部
産業振興課課長

後藤 哲憲 氏
Tetsunori Goto



1994年から旭川市工芸センターで木工企業支援に携わり、2009年には「旭川木工コミュニティキャンプ」を立ち上げ。現在はデザイン創造都市の推進を担当し、『もり』『まち』『もの』をつなぐ創造的なまちづくりに挑戦している。

PANEL TALK

各地域の取り組みを共有しながら、 産地が向き合うこれからの課題について考える。

飛騨産業株式会社
代表取締役社長

岡田 明子 氏
Akiko Okada



岐阜県高山市生まれ。2011年飛騨産業株式会社に入社。2020年の創業100周年を機に、自社の方向性を定めたいという想いからブランディング事業を立ち上げ、企業理念の言語化・体系化を牽引。2021年、代表取締役社長に就任。

プロダクトデザイナー
JIN KURAMOTO STUDIO 代表

倉本 仁 氏
Jin Kuramoto



1999年金沢美術工芸大学工業デザイン専攻卒業。国内家電メーカーのインハウスデザイナーを経て、2008年に『JIN KURAMOTO STUDIO』を設立。JAPAN CREATIVE 理事。2023年よりグッドデザイン賞審査副委員長。

株式会社安井建築設計事務所
経営企画室長 / 建築家

佐野 亮 氏
Ryo Sano



竹中工務店にてグラングリーン大阪の設計を担当し、2022 年より現職。建築から人や生物の「居心地の良い、生活圏を設計している。実現に向け、自然素材の力を借りながら環境と地続きになる建築の設計を行う。近年宇宙ビジネスも担当。

緑川木材株式会社
取締役

緑川 新之介 氏
Shinnosuke Midorikawa



愛別町の木材加工企業である緑川木材株式会社（1960年創業）で、地域資源を有効活用した道内初の3層パネル（LINAWOOD）を生産。旭川デザインプロデューサー養成事業を修了し、2020年からデザイン経営を実践中。



SETUP TALK

森に近づく持続可能な家具作り デザインと産業観光も世界へ発信

藤田：北海道は広葉樹が国内で最も豊富にある地域ですが、山側と繋がるのは簡単ではありません。家具メーカーは、ほぼ製材で仕入れてます。丸太から樹種を判別できない職人は多いはず。分離されがちな家具製造と林業をつなげるため、旭川家具工業協同組合は道産広葉樹を活用する「ここの木の家具・北海道プロジェクト」を2014年に始めました。輸入材より細い材が出ますが、それでも上質な家具を作れるよう技術を高めてきました。サプライチェーンも従来と違った対応が求められます。少なくとも加工の2年前から手配する必要があります。製材業者の理解を得ながら展開してきました。このように各方面とコミュニケーションを深め、川上に近づけるようになりました。2014年は道産広葉樹の使用割合は26.9%でしたが、10年後に78.0%に達しました。

これまで暖房で燃やされていた端材を使い切る、持続可能な取り組みも各社で進んでいます。例えばカンディハウスでは、馬具・皮革メーカーのソメスサドルと組み、互いの工場から出る端材を使ったアートオブジェの新ブランドを世に問いました。あさひかわデザインウィークの期間中、組合は「Meet

up Furniture Asahikawa」を開催していますが、ものづくりの現場に触れられるオープンファクトリーの参加メーカーは増えています。主会場の旭川デザインセンターは、デザインや歴史が分かる産業観光の拠点です。端材に親しむ「こっぱマーケット」も開かれ、子どもたちにも人気です。全国でも「家具の産業観光」を掲げる施設はほぼありません。旭川市は2019年、ユネスコ創造都市ネットワークの「デザイン都市」に選ばれました。これをきっかけに、藤本壮介さんやイタリア建築界の巨匠であるミケーレ・デ・ルッキさんらとのコラボレーションが実現。ものづくりとデザインの発信力が劇的に上がりました。家具が育んだデザイン都市は、今後も世界と繋がっていきます。



旭川らしい自然×ものづくり デザインの力で森の課題に向き合う

後藤：私は市役所に入庁して工芸センターに配属され、木工との関わりが始まりました。製造や販路拡大の支援を担当してきましたが、森や木工との関わりで私にとって最大のものは、2009年に始まった「旭川木工コミュニティキャンプ(AMCC)」。

デザイナーや作り手が道外から来て交流するというものです。当時から家具職員やクラフト職人が森に行ったことがない、デザイナーや売る側も木を知らずに仕事をしているといった課題がありました。それならば、まずはみんなで集まって、いろんなことを共有しようと。交流が生まれ、互いを知ることで、課題が見えてきます。初回のイベントでは当初、植樹をする企画でした。ただ木こりに「山の課題は植樹じゃない。いかに森を管理していくか。たまたま皆伐された森があるから植樹しようとなるわけで、森が本来求めているのは間伐です」と教わりました。そこで森に入り、将来どんな森にしたいかをみんなで考えて間伐しました。ほかにも、ジンギスカンを囲んで語り合う、旭川家具や関連の工場を見学するといったことを重ねてきました。

旭川市は2019年にデザイン都市となりました。旭川が発信すべきは、旭川家具を含めたものづくりや自然、そしてデザインが結びついている価値だと考えています。市役所の新庁舎建設にあたっては、応接室やレストラン、待合の家具を市有林の広葉樹で制作。市有林の針葉樹は庁舎内の天井や梁として活用しました。

2024年10月には「デザイン都市会議」が旭川で開かれ、21か国の48人がお越しになりました。「旭川の自然とデザインを五感で触れてもらおう」というコンセプトを掲げ、森での植樹体験もいただきました。

大阪・関西万博に向けて始まったこの「WOODS&DESIGN」も、地域材や林業の課題を万博をきっかけに考えよう、デザインで解決しようという思いで推進してきました。5月28日～6月1日にあった万博の



「地方創生SDGsフェス」では、行政だけで進めるのではなく、地域のクリエイターの方々に参加してもらいました。デザイナーや木工職人を交えた官民連携のチームを結成。針葉樹材のテーブルなどを展示したり、端材を活用したバードコールづくりのワークショップを開いたりして、1600人の来場がありました。

デザインは人と人、いろんな社会的要素をつなぐ触媒であり、人を幸せにするものだと思います。自然と社会の調和を図ることや、持続可能で幸せな社会を実現する役割もデザインにあります。

最近是全国的に雪害や森林火災、洪水といった問題が取りざたされていますが、すべて山に関わるものです。旭川市には家具製造に適した広葉樹の資源が豊富にあります。サプライチェーンの川上を抱えるデザイン都市として、何ができるのかを考えてきました。そこでGDPとは違った指標で光を当ててみたところ、この地域の豊かさがはっきり見えてきました。生態系サービスの価値は大きく、自然資本では全国でも上位に入っていたのです。

豊かな環境とデザインあつての旭川家具。家具メーカーが森と結びつきつつあるように、旭川では自然とデザインが密接に繋がっています。こうした自然や持続可能性を重視した取り組みは、ユネスコからも注目されています。森の課題解決は、旭川だけではもちろんできません。デザインで人と自然の共生を進めるための共有・共感・共創をWOODS&DESIGNから全国に展開できたらうれしいです。



PANEL TALK

分断された「川上」と「川下」をどう結ぶ？

齋藤:全国的なISSUEとして、サプライチェーンの川上と川下の分断があります。僕も、林業関係者と建築家やデザイナーの距離が遠すぎるのが疑問でした。

岡田:飛騨産業が大切にしている価値観の1つが「森と歩む」です。山〜製材所〜自社工場〜デザイナーの繋がりの中で、ボトルネックやコミュニケーションの齟齬がないかいつも考えています。

緑川:建材メーカーとして感じるのは、サプライチェーンは多層化し、川上と川下はまだ離れているということです。販売店の方に森へ来てもらって、想像以上に感動してくれます。デザインの力で、川下側にも感動が可視化されるといいですね。



佐野:建築は規模が大きくなると人間との距離も大きくなる。だからこそ自然素材の力を借りるようにしています。吉野の森に関わっていますが、林業(川上)から製材(川中)、デザイナーや建築家(川下)の人と「吉野杉デザイン研究所」を立ち上げて活動しています。地域ならではのデザインを考えるうえで、川上や川中への理解は欠かせません。

倉本:木製家具のデザインのポイントは、数十年かけて育った、温もりとやさしさのある木へのリスペクトです。どこから来て、どう削られているのかを理解しないと、素材の良さを見極めたデザインができません。

消費者の意識は変わりつつある。 デザイナーはどうか？

齋藤:森のことを考えると、有効活用のためのIDEAが立ち上がってきます。そのとき、意識を変えるべきなのは消費者なのか、デザイナーなのか？

岡田:弊社が経営的に厳しかった2001年に発表した「森のことば」は、節が主役のシリーズです。開発のきっかけは、現会長の私の父が、大量の廃棄材を目にしたこと。父のバックグラウンドは小売なので、疑問を言いやすかったのでしょう。自然の造形美である節を生かすIDEAでしたが、営業や職人は猛反対。「お客さまに失礼だ」という先入観、彼らなりの正義からでした。ただデザイン責任者は賛同してくれ、若い世代を中心に人気となり、経営回復に繋がりました。

倉本:「森のことば」で、日本中の家具メーカーが「え、節あり？」と驚き、世の中のお板が変わっていききましたよね。逆に節がないと「ちょっとニセモノッ

ぽいな」と思われることも。これまでの価値観を疑い、「こういう社会っていいんじゃない？」と新しいビジョンを提案するのもデザインの力です。

齋藤:いち消費者としては、へこみや傷も味があっていいと思います。常識を疑うパーセプションチェンジが必要です。

佐野:「こうあるべき」というフレームを外し、広い目で俯瞰したいですね。建築でもかつて「木は燃えるからコンクリートだよね」という風潮がありましたが、最近は技術やデザインのおかげで木造建築が脚光を浴びています。

緑川:弊社の主力の三層パネルは、SDGsや持続可能という言葉が広まってから、資源を有効活用するプロジェクトへの参画が増えました。広葉樹と針葉樹を重ねる、抜け節のある材は裏面に回すなど、適材適所を実現できています。





家具には向いていない？ 針葉樹の活用を進めるには

齋藤：今回、出品材のほとんどが広葉樹という銘木市にお邪魔しました。広葉樹が豊富な北海道でも、針葉樹をどう使うかというISSUEが横たわっています。「家具には使いにくい」とも言われる針葉樹は、いろんな産地で余っています。

岡田：「森のことば」の次に目を向けたのが、身近な飛騨のスギです。戦後大量に植えられ、花粉症で嫌われ者になった。その反面、大量に針葉樹を輸入しているので、これをどうするのかと。そこでスギの難点の強度不足を補おうと、飛騨の曲木の技術を応用した「圧縮材」を開発。「HIDA」というシリーズが生まれました。

倉本：スギやヒノキは未来の素材です。カリモクでは内側に硬い広葉樹を挟みながら針葉樹を使い、ヨーロッパでは針葉樹をそのまま使うブランドも増えています。針葉樹の活用は世界的なトレンドです。

岡田：社外から圧縮材で製造する相談も受けますが、ヤニの多さや強度不足などで断念するケースもありますし、「ここの針葉樹なら大丈夫」とも一概には言いにくい。もっと勉強したいです。

倉本：生育スピードが異なるので、例えば北海道の針葉樹と吉野のそれは違うはずです。

齋藤：針葉樹をもっと生かすには解像度の高いデータを取ったりリサーチしたり、みんなで資源化していかないと。各地で強度試験は行われているので、日本全体でインデックスを作るのはどうでしょう。



自然やものづくりと繋がる 「デザイン」を教育現場に



オーディエンス(まちづくり関係者)：オープンファクトリーや森に行くならともかく、消費者としては素材の出自や製造のプロセスを知る機会が少なく、見た目以外に判断する材料全然ない。どうすれば、価値を伝えられるのでしょうか。

藤田：「ここの木の家具」では商品にタグを付け、カンディハウスのカタログには「北海道ナラ」などと材料を示しています。「これは何？」「なんで北海道？」と聞かれると、全部説明できる。消費者の近くで表示するだけで大きく変わりますよ。

齋藤：映像や写真が1つあるだけで、全然違います。緑川：これからは、どの地域でいつ切ったかといったトレーサビリティが大きな価値になるはずです。オーディエンス(林業関係者)：既存の森林資源の活用を考えると、最大のキーファクターはデザイン。川上～川下のトレーサビリティを大切に、50年後にどんな森を引き継いでいくかのデザインを考えたいです。



オーディエンス(プロダクトデザイナー)：50年先というと、子どもたちの知識が大切になります。意識を変えるには知識が必要です。デンマークやミラノに行ってもいいのは、デザインのイベントに子どもがいること。子どもも楽しめれば知識の共有ができ、デザインや地域産業、教育が繋がると思います。

倉本：市場を席卷している大手の家具を見ると、情報の少なさや消費者側のリテラシーが気になります。知識を持って「本当にこの価格で作れるのか」「どんな材料なのか」と疑うことは必要だなと。

緑川：森林教育が盛んなヨーロッパでは、持続可能な森林経営を進めるための国際認証「SGEC(エスジェック)制度」が普及しているそうです。一方で旭川デザインセンターの「こっぱマーケット」は人気があり、道内では「木育」も進んでいるので、こういった活動を継続するのが大切だと痛感しています。

齋藤：SGECは一次産業の林業に対してなされるもので、製材業では「うちは関係ない」というケースが多くあります。サプライチェーン断絶の表れでもあるし、制度を設計する側への教育の問題でもあります。教育の中に、もっとデザインを入れていきたい。「デザインで未来の何かを変えられる」と伝えたいです。例えば、木育や森林教育にフォーマットがあってもいいでしょう。サプライチェーンや教育・研究機関などあらゆる環境がそろえば旭川はデザインでも突出しています。ここから全国に派生させていきたいですね。

NEXT ACTION

公開作戦会議から生まれた 新たなアクションの種

川上～川下を 結ぶデザイン

メーカーはサプライヤーとのコミュニケーションを深め、デザイナーや建築家も素材に向き合い、販売側にも森で得られる感動を共有してもらうなど、川上～川下を繋ぐ仕組みをデザインしたい。地域ならではのものづくりには、各層への理解が不可欠。商品には、素材の出自やトレーサビリティを説明できるように工夫したい。

針葉樹の活用へ 「共有知」を

有効に活用されていない針葉樹を家具材にするのは世界的なトレンド。同じ針葉樹でも、育った地域によって堅さなどの性質は違う。さらに、安全基準をクリアするため各産地で強度試験がなされ、新しい技術も生まれている。こうしたデータを集めたり、リサーチしたりすることで日本全体の「共有知」を追求したい。

認識を劇的に 変えるデザイン

「こうでなきゃ売れない」「それはお客さまに失礼だ」といった業界の常識や固定概念にとらわれてしまっていないだろうか。時に外部の視点も取り入れて疑い、俯瞰してみたい。「こういう社会はいいんじゃない？」と、新しいビジョンをデザインするのもいい。森林教育や木育でもデザインの手法を取り込みたい。

旭川発の 「デザイン」を展開

旭川市は大阪・関西万博で、「人と森と環境にやさしいデザイン」を提示し、針葉樹材の活用にもチャレンジした。課題解決やビジョンづくりに向け、さまざまなセクターや資源を結びつけるデザインの役割が一層求められている今、旭川で実践している「自然と調和したデザイン」を広く展開させていきたい。



TEAM ASAHIKAWA

【ものづくり産地フィールドツアー】

旭川地方木材協会(旭川銘木市)
株式会社 匠工藝
株式会社 大雪木工
有限会社 旭川銘木
北海道立北の森づくり専門学院(北森カレッジ)
北海道立総合研究機構 森林研究本部(林産試験場)
旭川デザインセンター
北海道旅客鉄道 株式会社(旭川駅舎)

【企画・制作】

旭川市経済部 産業振興課
Panoramatiks 齋藤 精一
Panoramatiks 西山 友梨

【デザイン・撮影】

WATARAI DESIGN PARTNERS 佐藤 公哉

【取材レポート】

旭川公園ゲストハウス 松本 浩司